シロハラクイナの日本列島への分布拡大と定着

中　村　一　恵

Range Expansion of White-breasted Waterhen, *Amaurornis phoenicurus*, into Japan and its Colonization

Kazue NAKAMURA

Recent occurrence records of White-breasted waterhen were gathered to investigate its distributional status in Japan. Results were as follows.

1. White breasted waterhen was a bird of extremely rare occurrence in Japan, which was only two captured records from Kyushu in 1931 and 1932. However, the birds became practically an annual occurrence in Japan since about 1970. (See Tab. 1 & Fig. 1.) About seventy three percent birds of all occurred from March to August and the highest frequency was in May. (See Fig. 2.)

   First breeding record of the species was observed in 1982 and secondly 1987 in Kyushu, respectively.

2. White-breasted waterhens had never been found by previous surveys (*e.g.* KURODA, 1925) which had made extensive collections of the avifauna of the Ryukyu Islands. It is very difficult to believe that this birds settling in a open-habitat such as grassy swamps and rice fields, could have been overlooked by that time. They had newly invaded into Okinawa-jima about 1968–1970 and had been recorded in Iriomote-jima from about 1975 onward, and now they succeed in colonizing there and they, its possibilities for population increase is great, today occupy Ishigaki-jima and Yonakuni-jima as well.

3. White-breasted waterhen seems to be able to disperse into Japan, possibly aided by spring-summer prevailing winds. An idea that the bird-producing area does not originate in Taiwan but Phillippines, was hypothetically proposed.

はじめに

クイナ類はその湿地潜行性から，脚・趾は発達しているが，胸骨は狭く翼骨も比較的短くて円翼をなし，短距離飛翔性である。しかしクイナ類には拡散性が潜在し，熱帯などに留鳥性の種類でありながら，北方や無定向的な分散が知られている（黒田，1984）。

拡散・侵入性のある熱帯産クイナ類のうち，日本で記録されるのは，シロハラクイナ（*Amaurornis phoenicurus*），セイケイ（*Porphyrio porphyrio*），ツルクイナ（*Gallicrex cinerea*）の3種である。セイケイについては，私の知る限り日本から3例記録されているが，現状では

自然分布か人為分布かの判断はつきかねる。シロハラクイナとツルクイナは明らかに自然分布である。このうち侵入頻度の最も高いのはツルクイナであるが，島での生存と個体群形成の点で最も注目されるのはシロハラクイナであろう。

この鳥は最近まで迷鳥と考えられていた（清棲，1965；日本鳥学会，1974）。しかし近年南部琉球の西表島，中部琉球の沖縄本島で繁殖する（高野，1981）と言われるようになった。琉球列島の鳥類相を総括した Kuroda（1925）や Hachisuka & Udagawa（1953）の論説の中にシロハラクイナの記録が皆無であることから，近年になって琉球列島に侵入し定着するようになったと判断される鳥である。その後，九州においても繁殖が確認されて繁殖分布はさらに北に伸びた。

今後シロハラクイナが九州を中心とする本土に定着できるかどうかは，現段階では予測するこは難しいが，できるだけ多くの記録を集積し，これまでの分布態を整理しておくことは，日本列島における鳥類相の流動化の一面を捉えていくうえで必要な作業と思われる。

結果および考察

1. 日本におけるシロハラクイナの出現および繁殖に関する資料

1-a 侵入記録

シロハラクイナの記録は，古くは寛政三年（1791年）三月摂津国高上郡高槻（現在の大阪府高槻市）で捕えられた1例が島津家に伝わる動物写生図にあり，この古記録は高島（1950）によって報告されている。近代になってからは，昭和6年（1931年）11月20日，福岡県朝倉郡三輪村（現朝倉郡三輪町）で雌1羽，翌年同じところで雄1羽が銃獲された（安部，1949）のが最初の記録である。これらの記録を Austin & Kuroda（1953）は自然分布として認めたが，日本鳥学会（1958）は上記の古記録も含めてすべて飼鳥の逸出個体に基づくものと判断し，日本鳥類目録に正式には登載しなかった（p.246 脚注参照）。

1931年，32年の福岡での記録以後，1967年に宮城県で捕獲されるまでの30有余年の間，日本においてシロハラクイナは記録されなかった（日本鳥学会，1974）。しかし表1に示すように1970年頃から毎年のように日本三本土（本州・四国・九州）および周辺地域で本種が記録されるようになった。

1967年以降記録のあった地域は，東北（宮城），関東（千葉，神奈川），中部（新潟，石川，山梨，愛知），近畿（大阪），中国（広島），四国（香川，高知），九州（福岡，熊本，鹿児島）の14府県，島嶼では，舳倉島，屋久島，男女群島女島，対馬，小笠原諸島父島および母島の6島からで，国外では韓国から2例報告されていた。記録は東北，関東で少なく，中部以西の西南日本太平洋側からの報告が多く，分布は全体として西寄りであった（図1）。最も北方に侵入した記録は東北の宮城からの1例であった。北海道からの記録はない。

福岡からの古い記録2例（表1，No.1,2）と繁殖記録（No.21,31）を除く26例で出現季節をみると，春夏期（3-8月）19例，秋冬期（9-2月）7例で，春夏期の記録が全体の72.9%を占め，中でも5月に最も多く記録されていた（図2）。

1-b 繁殖記録

日本で最初にシロハラクイナの繁殖が確認されたのは琉球列島の沖縄本島からである。大城（1972）によって，沖縄本島北部に本種が周年生息し繁殖している可能性のあることが示唆されたが，その後，与那城（1975）によって，1975年7月名護市のマングローブ林でヒナ2羽を連れ

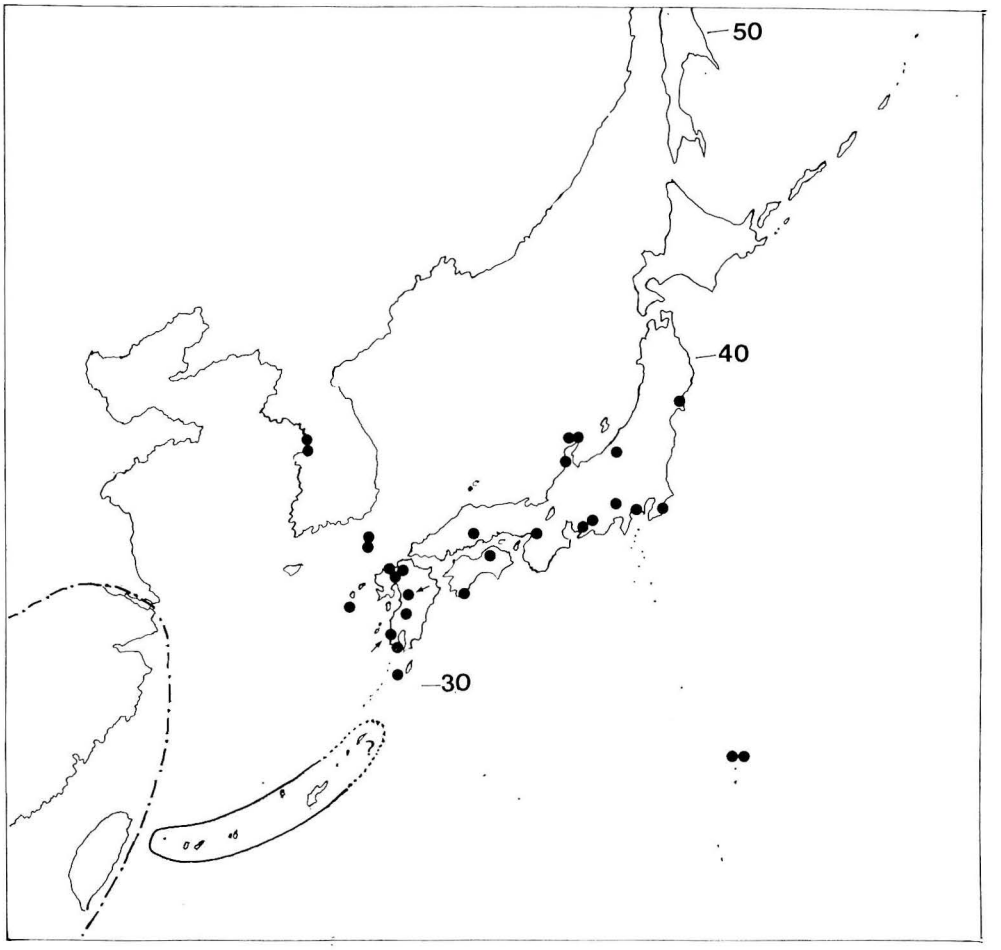

図1　日本三本土および周辺地域におけるシロハラクイナの侵入記録の分布。矢印は繁殖が確認された位置を示す。破線の地域は本来の分布地，実線は近年の定着域（奄美群島については不明）を示す。

た2組の成鳥が観察されるに至って，シロハラクイナが沖縄本島に繁殖することは確実となった。大城によると，名護市では1968年頃からシロハラクイナもしくは本種と考えられる鳥が捕獲されたり，目撃されていた。与那城によると，当時本種はハンター仲間のうちでワタルシー（腹の白い）クミラー（バン）と呼ばれ，稀に捕獲されるため，その剝製は高価であり，珍鳥扱いであったという。

池原（1983）の「奄美・沖縄鳥類目録」によると，現在シロハラクイナは，沖縄，屋我地，石垣，西表，与那国各島に留鳥として生息し繁殖する。宮古群島では，久貝・山本（1981）によると，8月に記録されているだけで繁殖は確認されていない。西表島における記録状況を表2に示す。

本土で本種の繁殖が確認されたのは，鹿児島県西部における1982年の記録が最初で，串木野市北部を流れる五反田川流域で4組17羽のヒナが確認された（田中，1983）。次いで1987年に熊本県菊池郡西合志町でも繁殖が確認され（高木，1987），また同年7月には熊本県八代市で交尾が観察された（谷口ほか，1987）。

表 1　日本三本土および周辺地域[1]におけるシロハラクイナの記録一覧

No.	年　月　日	観察地・採集地	羽数[2]	報告者・観察者	出典
1	1931. 11. 20	福岡県朝倉市三輪町	1♀C	安部　幸六	鳥**12**(58)：165
2	1932. 1.	福岡県朝倉市三輪町	1♂C	安部　幸六	鳥**13**(58)：165
3	1967. 8. 6	宮城県本吉郡志津川町	1 C	田中　完一	野鳥**32**(10)：3
4	1970. 5. 6	韓国仁川(インチョン)	1 C	伏原　春男	鳥**20**(90)：48
5	1971. 11. 3	石川県志賀町大坂		川端　義信	石川県の自然環境(1977)：122
6	1973.	熊本県球磨郡上村		谷口　育英	熊本の野鳥を訪ねて(1976)：8
7	1975.	香川県三豊郡財田町		岡田　英孝	香川県鳥獣目録(1980)：31
8	1975. 4. 23	大阪府吹田市藤白台	1 C	上田　恵介	野鳥**40**(12)：37
9	1975. 4. 23	新潟県南魚沼郡六日町	1 P	山崎　拓男	野鳥**4**(12)：38
10	1975. 5. 1	長崎県男女群島女島	1 O	林　宏	林　宏(私信)
11	1978. 5.	長崎県対馬		鴨川　誠	長崎県の鳥(1983)：41
12	1978. 5. 7	鹿児島県屋久島	1 O	花輪　伸一	屋久島原生自然環境保全地域調査報告書(1984)：582
13	1978. 10. 9	石川県舳倉島	1	出川　某	舳倉島の鳥(1979)：91
14	1980. 3. 3	千葉県夷隅郡大原町	1 C		山階鳥類研究所標本
15	1980. 6. 1	石川県舳倉島	2		舳倉島の鳥(続)(1981)：9
16	1981. 5.	長崎県対馬	1 P	石江　馨	石江　馨(私信)
17	1981. 5. 17	鹿児島県串木野市	1 O	田中　正一	Strix **2**：112
18	1981. 8. 29	韓国仁川(インチョン)	1 O	P. O. Won	Ilustrated Flora and Fauna of Korea vol. 25(1981)：573
19	1982. 5. 7	鹿児島県川辺郡川辺町	1 P	池長　裕史	野鳥**48**(3)：37
20	1982. 4. 28	福岡県福岡市	1 C	逸見　泰久	野鳥**47**(9)：38
21	1982. 8. 1	広島県庄原市小田町	1 P	小杉　光昭	比和科博研報(22)：13-14
22	1982. 4. 23～ 8. 5	鹿児島県串木野市	B	田中　正一	Strix **2**：112-113
23	1982. 12. 30	愛知県西尾市中根町	1 P	松原　敬親	野鳥の会愛知県支部報(4)：14
24	1983. 5. 21	高知県幡多郡十和村	1 P	澤田　佳長	Strix **3**：113
25	1983. 10. 4	愛知県一宮市	1 P	尾藤　重春	野鳥の会愛知県支部報(9)：12
26	1984. 1. 19	東京都小笠原村父島	1 O	千葉　勇人	Strix **4**：55
27	1985. 1. 7	東京都小笠原村母島	1 P	千葉　勇人	Strix **4**：55
28	1986. 3. 6～ 3. 26	福岡県小郡市下岩田	1 P	木原　直人	野鳥だより・ふくおか(83)：6
29	1987. 3. 8～ 3. 20	福岡県小郡市下岩田	1 P	木原　直人	野鳥**52**(11)：32
30	1987. 5. 7	山梨県韮崎市竜丘町	1 C		中村　司(私信)
31	1987. 3. 10～ 8. 15	熊本県菊池郡西合志町	B	高木　博敏	Strix **6**
32	1987. 9. 27～10. 18	神奈川県大磯町花水川	1 O	田端　裕	田端　裕(私信)

(1)　南西諸島を除く。
(2)　数字の後のC，P，Oはそれぞれ採集，観察，写真による記録，Bは繁殖記録であることを示す。

表 2 西表島におけるシロハラクイナの記録状況

調査期間	記録の有無	調査者	出典
1962. 3.27～ 4. 2	−	池谷奉文・中村好一	動植物研究会報(2)
1963. 3.26～ 4. 9	−	石川隆史	早稲田生物(12)
1963. 7.12～18	−	小峯浩二	動植物研究会報(5)
1964. 3.10～28	−	近辻宏帰	早稲田生物(13)
1970. 3.10～25	−	倉田篤	山階鳥研報 **4**(5)
1970.10. 7～17	−	黒田長久	山階鳥研報 **6**(3)
1971. 4. 1～ 4	−	島田勉	動植物研究会報(19)
1972. 6. 1～ 4	−	黒田長久	山階鳥研報 **6**(5/6)
1973. 3. 6～11・14～18	−	大塚豊	野鳥 **42**(1)
1973. 4. 8～12	−	森岡弘之	国立科博専報(7)
1973. 4, 1973. 6.	−	阿部学	特定鳥類調査(1974)
1974. 1.31～ 4.20, 7.18～9.13	−	高橋修	野鳥 **42**(1)
1975. 3. 9～ 6.12	−	〃	〃
1976. 4.～1982. 8.	+	河野裕美・庄山守	Bull. Inst. Oceanic Res. Develop., Tokai Univ. (4)
1979.12.17～1980. 1. 6	+	小山嘉一郎・他	野鳥 **45**(5)
1984. 3.17～19	+	松枝浩	動植物研究会報(26)
1986. 7.23～25	+	中村一恵	未発表資料

2. 侵入記録と季節風との関係

日本本土および周辺地域への侵入記録（表1）は，シロハラクイナの北方への著しい拡散が示された結果である。これらのうち採捕記録の捕獲状況をみると，小学校の建物の2階で捕獲（8月，表1，No. 3），疲労して飛ぶ力がなく港に浮いていたものを捕獲（5月，No. 4），夜間建物に衝突したと考えられる斃死体を拾得（3月，No. 8），ビニールハウス内で捕獲（4月，No. 20），果樹園にうづくまったいたものを捕獲（5月，No. 30）など，捕獲環境およびその状況が特異である。こうした事実は悪天候とくに風の影響を受けて漂着し疲労もしくは衰弱等の原因で捕獲されたことを強く暗示している。こうした例の捕獲季節はすべて4～8月の春夏期であり，とくに4～5月に集中している。台風が日本本土に上陸する季節よりも早く捕獲されているから台風による影響は除外される。

季節風の最も重要な特徴は卓越風向の季節的逆転である。「春一番」ではじまる第一段階の季節風は，日本海，中国東北地区，沿海州，北海道方面を通る強い温帯低気圧に吹きこむ風である。季節風の交替は3月から4月に起こるが，第一段階の南風は4月，5月に最盛期に達し，第二段階の南風は盛夏に吹く（倉嶋，1972）。これまで日本本土および周辺地域におけるシロハラクイナの出現パターン（図2）を見てきたように，その出現頻度は3～8月で高く全体の72.9%を占め，5月でピークに達し，その出現の多寡は南風の系譜とほぼ一致している。シロハラクイナの日本本土および周辺地域への侵入は，夏の季節風に助けられた結果の漂着によるものと判断され，当然それは南からの拡散に基づくものである。小笠原の父島と母島では冬期（1月）に記録されているが（表1，No. 25, 26，目撃記録），これも以下に述べる考察から夏の季節風による漂着であろう。

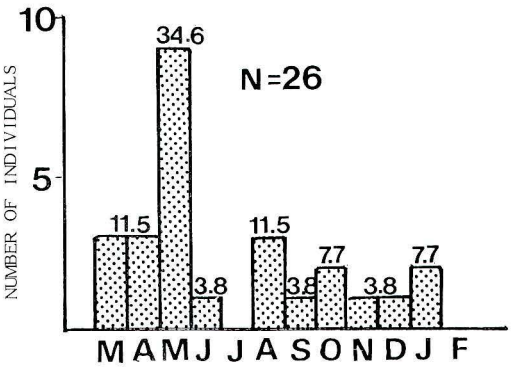

図2 日本四本土および周辺地域（南西諸島を除く）におけるシロハラクイナの月別出現記録。

これまで硫黄列島，小笠原諸島から記録されたクイナ類は，ヒクイナ，ヒメクイナ，ツルクイナ，バン，オオバンの5種である（Kuroda，1961；樋口，1984）。これらはツルクイナを除いてすべて旧北区産の渡り性のある種類である。ツルクイナは熱帯アジア主産であるが，繁殖分布は朝鮮半島まで延びており，ウスリー南部からの記録もある。小笠原のシロハラクイナは冬季に観察されてはいても，北方地域の大陸に分布していないことから，冬の季節風による漂着とは考えにくい。南方からの渡航により島に漂着し冬まで生きのびたとみる方が自然である。小笠原への渡航記録やカロリン諸島のヤップ島における1933年7月の捕獲記録（島根県立博物館，1978）などは，海上に飛出したものが運よく島にたどりつけた稀少な例であろうと考えられる。Ripley（黒田，1984による）は，目漂なく海上に飛出したものが大洋風や季節風に乗って運ばれることは大いに有り得ると考え，それに耐えうる飛力は十分あり，さらにクイナ類は，その習性上森林などには着陸できず，より遠くへ運ばれてしまう。こうして海に落ちるものも多いであろうが，平地の海岸のある島に着陸するものもあるだろうと推測している。

黒田（1984）は，クイナ類の漂行性は，熱帯における雨期，乾期などで湿地環境を求めて移動する必要と，個体群維持のため湿地から湿地へ分布を移動あるいは拡張する必要があるためと考えられると指摘している。

東アジアが全体として冬の季節風の体制から夏の体制に移行するのは4月から5月にかけてである。この頃になると赤道偏西風帯は南西季節風となって北半球に北上する。つまりアジアの雨期は初夏に北上する。シロハラクイナが湿地から湿地へ活発に移動するようになるのは，こうした雨期にともなう季節風の卓越する時期であろう。日本への漂行記録が春夏期とくに5月に集中していることはすでに述べた。

ではなぜ，それまで琉球列島に定着していなかったシロハラクイナが近年になって分布を広げ，さらには日本本土への侵入頻度が高まってきたのであろうか。この問題に対する答えは，そう簡単にでそうもない。しかしながら，地理的分布に関する考察結果に基づいて私見を述べれば，次章のように考えられる。

3. シロハラクイナの地理的分布と近縁種・亜種との位置関係

シロハラクイナは揚子江流域以南の中国南部から，西はインド，パキスタン，南はセレベス，

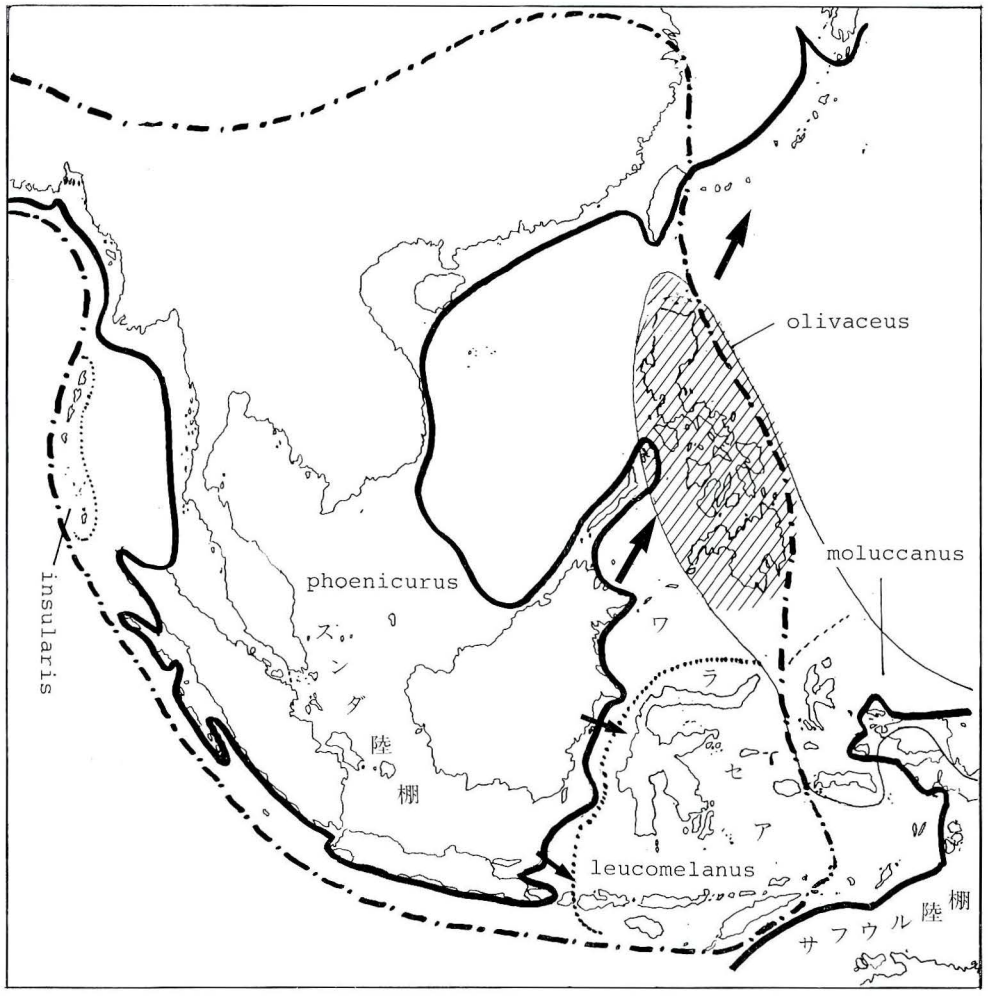

図3　シロハラクイナ（*Amaurornis phoenicurus*, 鎖線）とバンクイナ（*A. olivaceus*, 細実線）の地理的分布。点線は亜種分布の境界，斜線部は2種の分布が重なる地域を示す。太実線は大陸棚外縁，矢印はシロハラクイナの想定される分布拡大の方向を示す。

スンダ列島までの熱帯アジアに広く分布する（図3）。Peters（1934）によって5亜種に分けられていたが，最近 Ripley（1977）によって3亜種に整理された。すなわち，最も広い分布域をもつのが基亜種 *phoenicurus* であり，インド，中国南部からフィリピン，ボルネオ，大スンダ列島のバリ島まで分布する。ボルネオとセレベスの間のマカッサル海峡と スンダ列島のロンボク海峡を結ぶ海域を境にして，セレベスと小スンダ列島の亜種 *leucomelanus* と置きかわる。ベンガル湾のアンダマン諸島とニコバル諸島に第三の亜種 *insularis* が分布する。

基亜種 *phoenicurus* の地理的分布の特徴は，それが フィリピン 本体に おける分布を 除けば，大陸棚の外縁と ほぼ一致していることである。ウルム氷期の 最盛期には 世界的に海面が 100〜120*m*ほど低下し，そのため，スマトラ，ジャワ，バリ，ボルネオ，パラワン等の離島は大陸と陸続きになった（図3参照）。したがってウルム氷期の最盛期には，シロハラクイナ基亜種の分布はスンダ陸棚（スンダランド）に広く連続していたものと考えられる。

ここで近縁種との位置関係（地理的関係）を検討してみると，シロハラクイナの分布圏のもつ歴史性がいっそう明瞭となる。

シロハラクイナはモルッカ海峡とバンダ海を結ぶ線でニューギニア系の近縁種バンクイナ（*Amaurornis olivaceus moluccanus*）と分布を接してはいても重なってはいない。しかしフィリピン本体ではシロハラクイナとバンクイナの基亜種 *olivaceus* の分布が重複している。バンクイナがフィリピン本体で固有亜種化しているのに対し，そこでのシロハクイナは，Ripley の分類によれば，スンダランドの個体群との差は認められず，地理的亜種に分化していない。フィリピン本体における2種でのこのような位置関係と固有化の程度の違いは，重複侵入（Double invasion）によって引き起こされたことを暗示している。すなわち2波にわたる侵入を想定することができる。固有化の違いから判断して，第1波はバンクイナであり，第2波がシロハラクイナであろう。こうした重複侵入の著しい例は現に日本やニュージーランドのような島において認められている。

大陸系のハクセキレイ（*Motacilla alba lugens*）の日本列島への侵入は，近縁のセグロセキレイ（*M. grandis*, 固有[注]）よりも明らかに遅く行なわれている（中村，1987）。ニュージーランドにおいても，オーストラリアからのセイタカシギ（*Himantopus himantopus leucocephalus*）の侵入は，クロセイタカシギ（*H. novaezealandiae*, 固有）よりも遅く行われており，その植民は19世紀の初め頃と考えられる（Pierce, 1985）。ユーラシア大陸系のミヤコドリ（*Haematopus ostralegus*）が，ニュージーランドクロミヤコドリ（*H. unicolor*, 固有）と分布を重複させるようになったのはごく近年のことで，ここ100年以内と考えられる（Baker, 1975）。いずれもが大陸系の優勢な広分布種が島へ侵入することによって，近縁種との間に二次的な接触を生じ，分布を重複させるに至っている。それらは，一つのメカニズムのもとに統一的に説明されるべき現象と考える。シロハラクイナ基亜種もウルム氷期までさかのぼれば大陸（スンダランド）の広分布種であった。フィリピンで固有化していないのであれば，ボルネオ方面から新しく侵入し，先住していたバンクイナとの接触が生じて現在みるような分布（図3）を形成するに至ったと考えられる。これを直接証拠だてる資料は持ち合わせていない。しかしシロハラクイナの亜種 *leucomelanus* のうち，セレベス島，ブトン島および小スンダ列島のスンバワ島とフロレス島の個体群では，顔が白と灰色のぶち状のもの，前頭が灰色のもの，前頭が白いものなど変異に富み，基亜種 *phoenicurus* と *leucomelanus* 両亜種の特徴（基亜種の顔と前頭は白く，*leucomelanus* では灰色）が混在し，形質の不安定な雑種群が形成されている（White & Bruce, 1986）。一般的には形態的な特徴がばらついて不安定になり，著しい多型化を生じているのは交雑の初期にありがちな現象であるといわれている。雑種個体群の個体レベルにおける形質の発現様式が極めて複雑で，両亜種の遺伝子がさまざまな程度に浸透していることが推察されるのであれば，両者の交流はかなり近い時代に起きたとみるのが妥当であろう。地理的な位置からしてそれは当然基亜種がワラセアの一部に侵入し，*leucomelanus* と分布を重複させることによって起きた。その分布拡大の流れはセレベス方面よりはむしろ生態的同位の *leucomelanus* を欠くフィリピンに侵入する方向が主流であったろう。そして現在みるようなバンクイナとの重複分布を形成した（図3参照）。

フィリピンのシロハラクイナは近縁種および近縁亜種との位置関係のもとでミンドロ海峡やスル海を越える海上移動によってボルネオ方面から新しく侵入したものと推定される。分布を

注）日本固有種とされているが，ウスリー南部から朝鮮半島にかけて遺存的な繁殖体群がいる可能性が大きい（中村，未発表）。環日本海固有種に類型するのがよい。

広げたことによって日本との距離が縮まり，季節風に助けられて拡散する個体が死滅することなく，生きて漂着する機会は増大する。

すでにフィリピンの国土の半分以上が非森林化している（石，1985）。シロハラクイナは丈の高い草の多い湿地，丈の低い竹林，水田，サトウキビ畑，耕地，池，水路などに見られるオープン・ハビタットの鳥である（Ripley, 1977）。南方での棲息適地が増えれば個体数も増加し，海上を渡航する機会と個体数を増大させる。一方，本来湿潤高温気候下で広く森林で占められていた琉球列島も人間活動の歴史とともに変貌し，森林に替ってオープン・ランドが拡大している。到着地での好適な環境が広がっていれば，植民の機会はそれだけ増大する。西表島への侵入は1975年頃以降と推定され（表2参照），沖縄本島への侵入より遅く行なわれている。大きな島では侵入種にとって目標が大きいため，植民の機会はより大きくなるだろう。

シロハラクイナはどこからどのようにして日本に入ってきたのだろうか。常識的には琉球列島に最も近い台湾からの移住が考えられる。だが、琉球列島に地理的に近い台湾東部におけるシロハラクイナの分布密度は稀薄であり，分布は西部に片寄っている（Hachisuka & Udagawa, 1951；小林，1977）。台湾島の全幅をほぼ1と2の割合で東と西に分けている3000m級の山脈が障害となって，東部への広がりが大部分阻害されているとも考えられるが，台湾東部の地形は急峡で，北は台北の蘇澳付近から南は恒春半島の東海岸まで断崖がのびており，平野部の占める割合は西部と比較して極端に狭少であるのもクイナ類の植民を制限するものと思われる。以上のようないくつかの要素を考慮すると，シロハラクイナが台湾から移住してくる機会は少ないのではないか，それよりはむしろ，これまでの考察に基づいて私見を述べるならば，供給地はフィリピンである可能性の方が大きいように思われる。

おわりに

シロハラクイナは，西表島や石垣島では水田等の湿地にバンと混棲して見られるが，バンが見通しのよい水田の中央部にまで姿を現すのに対し，シロハラクイナは畔等の茂みから遠く離れることなく，人の気配を感じると草むらの中にすばやく潜行してしまう。しかしバンが湿地や水辺をあまり離れないのに対し，シロハラクイナは放牧地，乾燥耕地や道路際の草むらやヤブ地にも進出し，水辺を離れる傾向はバンよりも大きい。驚いて水田から舞い上がり，道路を横切って山の斜面を駆けのぼり，茂みの中に身を隠すような行動もとる。バンよりも乾燥地に適応できているようであり，環境選択の幅が広い。

西表島では親に引き連れられたヒナをしばしば目撃できたし，石垣島でも幼鳥やヒナを目撃した。シロハラクイナは琉球列島に定着できていると判断してよいと思う。

要　約

日本三本土と周辺地域におけるシロハラクイナの出現および繁殖記録を整理し，日本列島への侵入と定着の経緯について考察した。得られた主な結果は次のとおりである。

1. シロハラクイナは1970年頃から毎年のように日本本土および周辺地域から記録されるようになった。侵入記録は本州中部以西の西南日本に集中し，季節風の卓越期に同調的に3から8月の春夏期とくに5月に最も多く記録されていた。1970年頃から侵入記録が増える中で，1982年と1987年に九州で繁殖が確認されていた。
2. シロハラクイナは琉球列島の主要な島に新しく侵入し定着に成功している。沖縄本島へ

の侵入は1978～70年頃，西表島への侵入はそれより遅く，1975年頃以降と推定された。

3. 日本列島へのシロハラクイナの供給は，台湾からではなく，フィリピン方面からの侵入とする考えを提示した。その拡散には季節風が関係していると考えられた。

謝辞：末筆ながら，標本および文献の閲覧を許可下さった山階鳥類研究所柿沢亮三資料室長，閲覧の際多大な便宜をはかって下さった笹川昭雄氏に感謝の意を表したい。各地の記録を集めるにあたっては，花輪伸一，林宏，石江馨，中村司，田端裕，吉村信紀各氏からご協力を得た。これらの方々すべてに対し厚くお礼申し上げる。

文　　献

安部　幸六　1949. 福岡県に現われた珍らしい鳥（其一）. 鳥 **12**：164-171.

阿部　学　1974. 特定鳥類等調査報告書，pp. 223-244. 環境庁.

Austin, O. L. Jr. and Nh. Kuroda 1953. The biras of Japan, their status and distribution. *Bull. Mus. Comp. Zool.*, **109**; 279-637.

近辻　宏帰　1965. 西表島の生物〔VI〕，鳥類. 早稲田生物(13)：27-38.

Baker, A. J. 1975. Morphological variation, hybridization and systematics of New Zealand oystercatchers (Charadriiformes; Haematopodidae). *J. Zool., Lond.* **175**: 357-390.

Hachisuka, M. and T. Udagawa 1951. Contribution to the ornithology of Formosa. *Quart. Jour. Taiwan Mus.* **4**: 1-180.

Hachisuka, M. and T. Udagawa 1953. Contribution to the ornithology of the Ryukyu Islands. *Quart. Jour. Taiwain Mus.* **6**: 141-279.

樋口　行雄　1984. 小笠原諸島の鳥類目録. *Strix* **3**：73-87.

池原　貞雄　1983. 沖縄の野鳥. 誠文堂新光社.

石　弘之　1985. 蝕まれる地球. 朝日新聞社.

清棲　幸保　1965. 日本鳥類大図鑑. 講談社.

小林　桂助・張　英　彦　1977. 台湾の鳥相類，日本鳥学会双書第16編. 日本鳥学会.

河野　裕美・庄山　守　1982. 西表島西部および仲の神島の鳥類相. *Bull. Inst. Oceanic Res. & Develop., Tokai Uuiv.* (4)：101-120.

小山嘉一郎・古賀　光利・藤門　恵蔵・出島　和子・宇山　大樹　1980. 冬季における沖縄の野鳥. 野鳥 **45**：298-301.

久貝　勝盛・山本　晃　1981. 宮古群島の鳥類目録. 沖生教会誌（14）：15-29.

倉嶋　厚　1972. モンスーン. 河出書房新社.

倉田　篤　1966. 八重山諸島西表島の鳥類. 山階鳥研報 **4**：358-370.

Kuroda, N. 1925. A contribution to the knowledge of avifauna of the Riu-Kiu Islands and the vicinity. Author's Publication.

Kuroda, Nh. 1961. The over-sea crossings of land birds in the western Pacific. *Miscel. Rep. Yamashina Ornth. & Zool.* **3**: 47-54.

黒田　長久　1981. 琉球の秋の調査（1970）. 山階鳥研報 **6**：260-285.

黒田　長久　1972. 琉球の春の調査（1972）. 山階鳥研報 **6**：551-568.

黒田　長久　1984. クイナ科の島嶼分布（鳥類分布進化の島嶼効果の１例）. 山階鳥類破究所50年のあゆみ，pp. 34-44. 山階鳥類研究所.

松枝　浩　1985. 沖縄地方における春期の鳥類. 動植物研究会報（26）：84-99.

森岡　弘之　1974. 琉球列島の鳥相とその起原. 国立科博専報（7）：203-211.

中村　一恵　1987. ハクセキレイとセグロセキレイの分布総説. 日本の生物 **1** (5): 44-51.

大城　正雄　1972. 沖縄にも生息するシロハラクイナ. 野鳥 **37**: 312-314.

Ornithological Society of Japan 1958 A hand-list of the Japanese birds. Fourth & Revised Edition. Ornithological Society of Japan, Tokyo.

Ornithological Society of Japan 1974 Check-list of Japanese birds. Fifth & Revised Edition. Gakken, Tokyo.

大塚　豊　1977. 沖縄を探鳥して. 野鳥 **42** (1): 42-45.

Reters, J. L. 1934. Check-list of birds of the world vol. 2. Museum of Comparative Zoology, Harvard University.

Pierce, R. T. 1984. Plumage, morphology and hybridisation of New Zealand Stilt, *Himantopus* spp.. *Notornis* **31**: 106-130.

Ripley, D. 1977. Rails of the world, a monograph of the family Rallidae. David R. Goding, USA..

島根県立博物館　1978. 伊達コレクション鳥類標本目録. 島根県立博物館.

高野　伸二　1981. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会.

高橋　修　1677. 西表島の野鳥. 野鳥 **42** (1): 36-40.

高島　春雄　1950. シロハラクイナの古記録. 採集と飼育 **12** (1): 23-24.

田中　正一　1983. 九州でのシロハラクイナの繁殖初記録. *Strix* **2**: 112-113.

谷口　育英・高木　博敏・工藤　栄介　1987. 熊本にもシロハラクイナが繁殖. 私たちの自然 (311): 23.

White, C. M. N. and M. D. Bruce　1986. The birds of Wallacea. B. O. U. Check-list No. 7, Brit. Ornithologists' Union.

与那城義春　1975. シロハラクイナの繁殖, 本邦初記録. 野鳥 **40**: 655-656.